

委員会名称	第4回別府市立図書館及び別府市美術館整備基本構検討委員会	協議日	2017.01.23
		協議場所	別府市役所 レセプションホール
出席者	中山委員長、中村委員、田中委員、鶴田委員、山出委員、澁谷委員、池田委員、豊田委員、渡辺委員、加藤委員、明石委員、大鶴委員、大津委員 (アドバイザー)：花井氏		
	別府市教育庁生涯学習課(事務局)：		
	アカデミック・リソース・ガイド株式会社		
01. 資料	<ul style="list-style-type: none"> ・ 委員会次第 ・ 第3回「まちから考える図書館・美術館づくりワークショップ」実施報告書 ・ 2 基本構想策定に向けて【審議】 		
02. 検討事項	第4回 別府市立図書館及び別府市美術館整備基本構想検討委員会		
	要約：基本構想策定に向けて		
	<p>【議事】</p> <p>■1 「第3回まちから考える図書館・美術館づくりワークショップ」について【報告】</p> <p>(ARG) 別紙の通り報告。</p> <p>(事務局) 参加した委員から3回目ワークショップ、並びに全体を通しての感想をいただきたい。</p> <p>(N委員) 3回とも参加した。1回目、2回目は実際にまちを歩く形式だったが、3回目は会議室の中で、コンテンツをどうやって実際の施設の中に落とし込んでいくかというまとめを行った。ストーリーボードに描かれたものは一つひとつがとてもおもしろく、ワクワクとしながら発表を聞いた。自分自身大変勉強になった。忙しくて参加できなかった委員の方も、ストーリーボードを見てもらうことで、市民の方はこんなことを考えているというのが見えてくるのではないかと。</p> <p>(J委員) 参加してみて一番強く感じたのは、自分自身、司書の勉強をしているので内部の立場として考えてきた。図書館を外から見るとこんなふうになっているのだと初めて気づけたということである。「こうしたらいいと思う」という意見がたくさん出てきたが、それは図書館ができてからこれまでの長い歴史の中で、必ず何度も何度も出てきたような話であったと思う。それらは人の手が足りなかったり、お金がなかったりといった理由で消えしまった。いろんな意見が出てくる度に、参加していた図書館の方が悔しそうに聞いていた。実は図書館でもそういうことをしたいとこれまでも考えてきていて、でも実現できなくて心苦しく思っているんですよと言いたければいいけれど言えない、そういう状況がワークショップの間続いている、自分自信は図書館では働いたことはないが、楽しさよりも苦しさを感じて参加していた。</p> <p>(事務局) 総括としてアドバイザーから講評をいただきたい。</p> <p>(アドバイザー) 3回とも参加した。自分が体験したワークショップの中でもとても上質だと思った。ワークショップを開催すると年配の参加者が多くなってしまいが、この3回のワークショップは若い女性の参加が多く、和気あいあいとしていた。ざっくりと計算したら、参加者の平均年齢が28歳だった。みんなのやりたいことが、運営側にすると知りたいことだと思う。それが形にはまだまだないが、ヒントとしてたくさん落ちていたと思った。J委員もおっしゃっていたが、外から見ると、いつも図書館に関わっている側は忘れがちである。お客様の立場になって考えたとき</p>		

に、初めて運営がうまく回っていくのだと思っている。外から見る事ができたというのは素晴らしいことだった。苦しかったとおっしゃっていたが、苦しいこともたくさん言い続けていかないと忘れてしまうと思うので、苦しいだろうが聞いてあげて欲しい。

■2 基本構想策定に向けて【審議】

□目次（構成案）について

（ARG）別紙の通り説明。

（C 委員）課題に対応した委員会の考え方、解決策が必要なのではないか。第4章に入れられればよいかとも思うが。

（ARG）構想そのものが課題に対する解決策となる。特に第4章に記されていく。構想段階であるので、いくつかの方策を指し示すこととなる。基本計画では、より具体的なアクションを定めていくこととなる。

（委員長）「はじめに」で触れるという方法もある。

□第1章 別府市の図書館・美術館の現状と課題

（ARG）別紙の通り説明。

（N 委員）施設コスト、人件費、費用面の長期計画など、お金のことは記載しなくてもよいのか。

（事務局）構想委員会の中では深くは検討しない。あまり縛ってしまうと自由な意見が出ないということもあり、費用面の検討は今後行っていく。

（委員長）現状の課題として、予算が足りないという点を記すべきではないか。

（事務局）例えば「適正な司書の配置」という表記はありうるが、明確な人数や予算等を記すのは次の段階に進んでからだと考えている。

（委員長）「はじめに」のところで、現在は構想の段階であるということを説明すればよいのではないか。

（F 委員）企画展はコレクションの入れ替えだけでない。別府市の場合、予算はほとんど無いのではないか。適正な金額までは記さなくとも、予算が少ないために企画展が開催されていない、ということとは記すべきではないか。

（C 委員）共通の課題であれば、図書館・美術館の表記をそろえるべきではないか。

（M 委員）企画展ができないのはスペースの問題でもある。老朽化だけでなく、広さも課題。学芸員がしっかりしていないと、他館から展示物を借りられないということもあるので、人員体制についても記していただきたい。

（L 委員）美術館のほうは、見出しのセンテンスが図書館に比べて長い。同じくらいにそろえたほうがいいのではないか。

□第2章 一体的整備に対するメリット・デメリットの整理

（委員長）まずは3分程度資料を読む時間を設ける。

（ARG）別紙の通り説明。

（L 委員）「である調」で表記するか、「ですます調」で表記するか。市民に向けたものであるならば、もう少し短く、わかりやすく記したほうがよいのではないか。具体例とメリットについては分けて表記したほうがよいのではないか。

（事務局）市民の方がわかりやすいようなものとして考えているので、文言等については今後も

調整をかけていく。

(J 委員) 図書館は入館料を取らない施設、美術館は取る施設である。情報が無料で手に入るのが当たり前で、物質が無ければお金をとらなくてはいいいのではないかと、という議論が頻繁にされている。図書館と美術館を一緒にすることで、なぜ図書館は無料で入れるのに、美術館のほうはお金を取るのかと、意識がさらに曖昧になってくるのがデメリットとしてあるのではないかと。

(委員長) 美術館を無料とする予定はあるか。

(事務局) まだそこまでは検討していない状況である。富山市や太田市を参考にしながら、どのようなかたちがあるのかを検討していきたい。

(C 委員) 根源にあるのは社会教育法である。図書館は社会教育施設であり、博物館・美術館は教育施設ではなく、機関である。そういったことを構想の中でも述べるべきではないか。一体化には費用面もあるのではないかと。運用費などについても述べる必要がある。「一体整備」という言葉がわかりづらいのではないかと。

(委員長) メリットの主張と具体的事例は分けて書いた方がよい。デメリットも箇条書き的にまとめる。

□第3章 近隣都市の現状から考える別府市の図書館・美術館のあり方

(委員長) 資料を読み込む時間を設ける。

(ARG) 別紙の通り説明。

(L 委員) 全国のコストなどの事例を入れるべき。

(C 委員) 文章が長すぎるのではないかと。表の内容がわかりづらいので、噛み砕いたわかりやすい表現にすることが必要である。「学校ではできない」と書いてしまうと学校を軽視しているようにとられるのではないかと。

(委員長) 「大分県文化創造戦略」にのっかってこの計画が進められているというふうに読めるが、そうであるならば、この戦略がどんな目的で策定されたのかについても載せた方がよいし、特に関係ないのであれば明記する必要はないのではないかと。

(K 委員) 表がやはりわかりづらい。目標がカテゴリー分けされているが、これが未来に対する期待なのかどうかかわからない。どこでもだれでも観光情報を得られるというのが「別府市ならではの特色」というカテゴリーなのはなぜか。他の自治体でも取り組んでいることではないのか。現状に向けてのことか、未来に向けての期待なのかかわかりづらい。

(N 委員) ワークショップで出てきた意見は、まさに別府市の図書館・美術館への期待と思う。ワークショップの意見を集約していただきたい。

(委員長) ワークショップのことに触れられていないので、ワークショップの経緯などについても盛り込むべきではないかと。

(L 委員) 第3章の内容を踏まえて第4章となるので、もう少し具体的に書き込みがないと次の議論につなげづらい。

(N 委員) 前回の資料にあった図はととてもわかりやすく、簡潔だった。

(ARG) 前回資料の図をよりわかりやすくしたものを用意する予定である。

(事務局) 欠席のG委員からのメールを報告する。図書館も美術館も、別府市の教育基本計画のもと、施設・機能の中にどのような学びを用意し、その学びによってどのような人材を育て、施設内外で学びを活かした活動をしていただくかを視野に入れる必要がある、というご意見である。

□第4章 別府市の図書館・美術館づくりに向けて 新しい別府市の図書館・美術館のコンセプト

(委員長) 資料を読み込む時間を設ける。

(ARG) 別紙の通り説明。

(K 委員) ワークショップの発表であったように、学生が学ぶだけではなくて、読み聞かせなどを通してお母さんも学ぶことができるという視点を盛り込みたい。子育て中の方や高齢者の方なども対象に入れたほうがよい。多様性についても、どんな多様なのかを具体的に明記したほうが良い。国際的な多様性だけを指しているのではないと、委員会に参加しているのでわかるが、そうでないとわかりづらい。「参加」も、何に参加するのかわからない。図書館で行われているイベントへの参加なのか、まちづくりへの参加なのか。「この場所はどんな人に対しても開けています」という部分の「どんな人」の具体例が限定されているので、もっと広い対象を指す書き方が良いのではないか。

(L 委員) コンセプト部分が最初に来るべきなのではないか。小見出しがないとわかりにくい。頭の中に入ってくる文章の組み立て方が必要である。コンセプトももっと短いほうがいいのではないか。「ひと=まち つなぐ文化 そして広がる」など。コンセプトは市民に対するものが先で良いのではないか。ポイントも3、4の方から書いた方がよいのではないか。「まち=図書館×美術館」「観光・温泉=図書館×美術館」など、そろえた表記が良い。

(ARG) 4の学びについて非常に重要だと考えているが、これまでの委員会では十分に議論されていないので、最後の項目とした。ぜひともご意見をいただきたい。「学校ではできない」という部分も不十分な書き方で申し訳なかった。子どもだけでなく、社会人の学びの場であるという意味や、年配の方で、本当は学校で勉強したかったけれどもできなかった人をも対象にするという意味を含ませていたが、わかりづらかったと思う。委員のみなさんの意見を取り入れていきたい。

(B 委員) 表現などについての赤入れは今後機会があると思うので、「ここをどんな場にしたいのか」というところを明示したほうが良いと考える。「まち全体が図書館・美術館になる」というところも、どちらかというコンセプトなのではないか。そのために図書館・美術館がどうあるべきか。文化の豊かな別府の活動の拠点であるとか。あるいは温泉との連携も、例えば温泉都市としての別府のポータル施設とか、入り口施設であるとか。「3. 多層的な参加の仕組みの構築」も、人と人、観光客と市民、別府の中の多層的な人たちがつながる施設、であるとか。4の学びについては、「別府を語れる人材を育てる場」をぜひ取り入れたい。美術館と図書館が融合した施設というのはまだまだ事例が少ないので、そこを担える人材を確保することが難しいというのもデメリットの一つであり、担える人材を育てられたとしたら、別府市にとって計り知れない財産になる。全体として、情報と人をつなぐことに触れられているので、アーカイブの活用についても3か4に入れていただきたい。

(D 委員) 一般の人には「図書館」と「美術館」という固定概念がある。コンセプトそのものは、地域文化のミュージアムというイメージが強い。今までにないものをつくろうとしているので、市民からは意見がとても言いにくいコンセプトだと感じている。複合的なコンセプトを持った地域ミュージアムをどう表現するのが良いのかとても難しいと感じた。多様な要素を持った施設をオペレーションするには、マネージメントする人の問題が最も大きい。その人がある程度意思決定して、財源を持っていないとオペレーションはできない。マネージメントする人の問題として、役所の人員だと務まらないのではないかと感じた。マネージメントをする人の程度も高いので、年収を含めた問題なども出てくると思う。コンセプトについては、もっと市民にわかりやすい書き方が必要である。

(委員長) 最後の一文で「総合的なクリエイターが必要である」ということを明記してもいいのではないか。

(F 委員) いろんなことが詰め込まれているので整理しないとわからない。既存の図書館や美術館の

話が4つのポイントに入っていないからではないか。D委員も言うように、この新しい施設は、別府を素晴らしいまちとして子どもたちや後世につないでいく、そのための文化・学びというものの大きな役割を果たす拠点となる。それには、拠点を中心としてまち全体を活用していくようなオペレーションの仕方があると思う。それとともに、図書館は本があって、それを借りる、あるいは読むというような行為があり、それに付随する読み聞かせがあったりする。しかし、美術館は今、幅広くなっていて、どこまでがアートなのかはとてわかりづらい。昨今は、社会がより良くなっていくためにアートや文化をいかに役立てるかという議論が世界的に活発になっていて、そこでは必ずしも美的な観点からのアートがあったりするわけではない。美術館がどういうことを果たしていき、どんな展開をしていくか、ということを入れていくべき。一つはコンセプトの明確化だと考える。ミッションをはっきりさせて、別府における美術館・図書館が何を出すのかという目標、ビジョンを打ち出していく。それが4つの項目の見出しとなる。既存の美術館・図書館ではなくて、別府市は世界に先がけて新しいものをつくっていく。だから別府の子どもたちがそういった最前線を学んでいながら、さらにこの地域のことを理解していき、シビック・プライドを高めていくということが大きな方向性だと考える。そのようにうまくまとめていただけると良い。

(H委員) 学校に勤めている教員の立場からすると、学校でできないことや限界はある。教室、学校図書室、パソコン室だけで何かを調べて学ぼうと思っても限界があるので、学校を出てまちに行き、いろんなものを見ていくという時間をたくさん学校では取り入れている。担任が子どもを連れて探検に出るか、見学をするなどして、自分で見て発見するだけでなく、今はコミュニケーション能力も育てないといけない。いろいろなまちの人にインタビューをして情報を得たり、働いている人や施設に来た利用者にどんな思いがあるのかを訊く、ここにはどんな素晴らしいところがあるのか訊くということもやっている。資料に書いてあるような図書館・美術館になると子どもたちのためになると思う。確かに学びは一生続けられるものだから、学生に限らずお母さんやおじいちゃんおばあちゃんたちにも、というのはよくわかるが、子どもたちにとってという視点で自分は見ている。8ページにも「生まれた場を深く知れる場」だとか、10ページにも「地元へ愛着を持つ」という文章があるが、社会科や総合的な学習で、別府のまちを調べるといっているのを行っている。やっぱり温泉、竹細工がメインになってくる。近くに気軽に訪ねられる温泉が無いという学校もあるので、温泉について調べられる場所があるととても良いと思う。観光という面では、自分は今年3年生を受け持っているが、油屋熊八さんのこともいろいろ調べていくのだが、資料には限界があり、別府のまちをこんなふうにしていこうと考えていた熊八さんのことが、いろんな写真やエピソードや何かの物など、実際に見ることができると、さらに学習が深まると思う。学校から行くだけでなく、放課後や休みの日は保護者と一緒に出掛ける。現在はお母さんに連れて行ってもらって、本を借りて帰るというだけだが、他にも目的があり、いろんな見るものがあるとすれば、子どもは子どもでためになるし、連れて行くだけでなく、親も自分の目的があって子どもと一緒に何か活動ができるとか、一緒に楽しめるものになるとさらにいいと思った。

(委員長) 市長が「別府学」を提唱されている。市民も古くから自分たちでボランティアガイドをしているというのは、他にはほとんどないものである。また、いろいろなイベントが年中行われているというまちも非常に少ないので、そういった背景の中で、どんな美術館・図書館が必要なのか、それにはどのようなクリエイターの人が必要なのかということにも言及して整理してもらえれば、もう少しわかりやすくなるのではないか。

(I委員) 小・中・高の学生が見てわかるようにしていただきたい。文章は2、3行でいいのではないか。

(J 委員) 学校でできることという話があったが、図書館は「教育」をする立場なのだろうか。図書館は市民や利用者の上にいる存在なのではなくて一番下のほうで、利用者は教えられるのではなくて、利用者が学習をしたと思ったときに図書館を利用し尽くすという立場ではないか。利用者は市民だけでなく、学校や団体も利用者である。学校ができないことを図書館がするというよりも、学校ができないことをできるように支援するのが図書館の役割ではないだろうか。その場合、図書館のコンセプトを考えると、「図書館はこういったことができますよ」と言ってしまうと、逆にこれだけしかできないと思われてしまう可能性もある。できるだけ区切っていかないで、ありとあらゆることが可能で、利用者が叶えたい希望であればそれに応えていくというかたちをきちんと伝えて欲しい。

(K 委員) コンセプトの中に、図書館・美術館とは何かという基本的なことが書かれていないところで、+αとして「こんなことができるようになります」という部分が多く書かれていると思う。それはとても良いことではあるが、もともと図書館は本を借りるところであるとか、知識を得るところである、それに+αとして、例えばいろんな人と出会うことができる、というような書かれ方をしたらもっとわかりやすくなるのではないか。別府市の今の図書館が、小さかったり場所が悪かったりというのはもちろんあると思うが、「図書館は本を借りる場所」「読む場所」「勉強する場所」と思われているから利用しないのではないか。それだけでは今、図書館は足りないからこそ、どうやって市民のニーズに応えていくかということで、ワークショップでも出てきたような意見として、教育があると思う。教育という表現も難しいところではあるが、必ずしも「別府の歴史について図書館で学びましょう」でなくても良いと思う。子どもたちにとって経験値を得られる場所が図書館であり、美術館であって良いと思う。学ぶだけではなくて、経験値を得られるような場所、本を読むだけではなくて、+αでこんなこともできるから子どもたちの経験値があがりますよ、という書き方が必要だと思う。+αの書き方が重要である。

(委員長) 子どもたちに限らず、大人が知らないことを図書館で調べよう、と思いつくような施設があるのはいいと思う。文章をわかりやすく、できれば子どもたちでも理解できるようなものを目指す。4つのポイントの順番などを再編成する。

□全体を通して

(L 委員) 美術館も図書館も専門性が必要。専門性が無いとひろがりが出ない。今までの議論は横のひろがりの話が多かった。「専門性をおさえた上で」というのは必ず入れていただきたい。

(O 委員) 学校ではできない創造的な学びの場というのがとても良いと思う。自分は幼児教育を勉強しているが、待機児童が全国的に問題になっている。大分にも待機児童がいて、このまま続いていくと、クリスマスなどのイベントを知らずに成長していく子どもたちが出てくるかもしれない。新しい図書館ができたなら、図書館にサンタクロースがやってきて、待機児童の子どもたちもサンタさんに会えるような場を設けられればいいのではないか。自分も小さいころは図書館へ七夕の短冊を見に図書館に行っていたので、イベントをもっとできるような施設があれば良い。

(委員長) 保護者が無関心な家庭だと、サンタに興味を示さなくなる傾向があるようだ。それには図書館も役割を果たすと考える。

以上